

44. 自殺企図による縊頸2例の高気圧酸素治療経験

波出石弘 大田英則 日沼吉孝*

鈴木英一* 小林恒三郎** 犬上 篤***

秋田県立脳血管研究所 脳神経外科

同 *高気圧酸素治療室

同 **理学診療科

同 ***放射線科

縊死の死亡機転は、気道閉塞による窒息、頸部動静脈の閉塞、および頸部神経叢圧迫による心呼吸停止といわれている。今回我々は自殺企図による縊頸により、内頸動脈閉塞、椎骨動脈閉塞をきたした2症例に対し高気圧酸素治療(HBO)を施行したのでその治療経過を報告する。

症例1:56歳男性。左中大脳動脈瘤術後、2回の痙攣発作をおこしうつ状態となり縊死を図った。来院時、昏睡、除脳硬直位をとりCT上右中大脳半球の腫張が認められ、右内頸動脈閉塞が疑われた為発症翌日2ATAにてHBOを施行した。HBO中脳波(EEG)および体性感覚誘発電位(SEP)測定を行った。EEG上の改善は認められなかったが、右刺激SEPは2ATA下で改善を示した。しかしこの改善はHBO終了後、治療前に戻った。保存的治療を行い現在植物状態である。

症例2:66歳女性。パーキンソン氏病にて当センター入院加療中、ナースコールのコードを首に巻き、ベット上より転落、縊頸を図った。発現時心呼吸停止、蘇生術にて人工呼吸管理となり、同日2ATAにてHBO施行した。HBO中EEGではslow α 波を認めるようになったが減圧とともに徐波化した。またSEPは反応を認めなかった。CT上中脳から両側視床に低吸収域を認め発症より6日目に死亡した。

縊頸によりanoxiaや、内頸動脈、椎骨動脈等の血管閉塞がおこった場合HBOは脳浮腫やischemic penumbraに対し治療効果が期待される。しかしbrain damageが広範な症例に対しその効果はあくまで一過性であり予後を変え得るに至らないと思われた。

これら2例の治療経験に文献の考察を加え、縊頸例における高気圧酸素治療の適応と限界について述べる。

45. 子癇患者の意識障害に対する高気圧酸素療法の有用性について

並木昭義¹⁾ 今泉 均¹⁾ 高橋長雄¹⁾

渡辺広昭²⁾ 山谷和雄³⁾ 渡辺明彦⁴⁾

¹⁾札幌医科大学麻酔科, ²⁾ICU, ³⁾旭川日赤病院救急救命センター麻酔科, ⁴⁾日鋼記念病院麻酔科

子癇は妊娠中毒症の重症型に分類される。最近我々は3年間に8症例の子癇患者の管理を経験し、分娩後の痙攣に対してバルビタール療法を5症例に、意識障害に対して高気圧酸素療法(OHP)を4症例に併用した。子癇患者にみられる意識障害はその病態生理から脳血管攣縮に基づく、脳の低酸素状態に起因するものと考えられる。今回、痙攣が消失した後にも意識障害の残存していた4症例にOHPを行い、全例良好な結果を得たので報告する。

【症例】4名の患者は20~22歳の初産婦で妊娠子癇のため帝王切開術が施行された。娩出後も痙攣の頻発する3症例に対してバルビタール療法が施行され、それ以降痙攣は出現しなかった。しかし、全例に意識レベル3~200におよぶ意識障害がみられた他、視力障害、視野障害、頭痛を訴えた症例もあった。術後1~2日目のCT Scanの所見では、2症例に基底核の低吸収域(以下LDA)、そのうちの1症例は後頭葉にもLDAを認めた。しかし、他の2症例においては明らかな所見は認められなかった。OHPは全経過60分で2.8ATAを30分間維持し、原則として1日1回行った。4症例は1回~10回のOHPを受け全例、著しい改善を認め何ら意識障害を残すことなく治癒した。

【結論】産科疾患の中で、痙攣など脳症状を主症状に発症する場合子癇が最も考えられるが、他疾患との鑑別上、CT scanはじめ種々の検査を行う必要がある。子癇患者には脳血管攣縮による低酸素脳症が生じており、本症例で呈示した如く、大脳皮質基底核にLDAを呈する症例もある。子癇患者の意識障害や視力・視野障害に対して、OHPは極めて有用な方法であると考えられる。